
LEO

三城 智人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

LEO

【Nコード】

N4028B

【作者名】

三城 智人

【あらすじ】

少年は、彼女と出会い、そして・・・。

プロローグ

前書き

いやはや、今回これを読むにあたって1つの注意を！！あゝいや、1つじゃないな。(殴)

その1：漢字間違いは結構あるのでよろしく。

まあ、その辺はこんなもんか？ってな具合に読んでってくださいー(汗)

その2：意味不明な部分もたつくさんあるのでよろしく。

その3：あんまり深くは聞かないください(汗)

私もよくわからずに書いてました。

期待しないでください。くだらん小説ですので・・・。こんなくつたらん小説だけどよんでくれると幸いです。

あ、できたら感想お待ちしております。

(っっていうか先にお前が書き終えろよ。殴)(そうですね。すみません)

そして、できればパソコンで見てください。

I will be here . . .
I will be waiting . . . here . . .
For what?
I will be waiting . . . for y
o u . . . s o
If you come here .
You will find me .
“ I promise ” .
K u r r a r i t h . . . S q u a l l

少年はあの時のことを今でも昨日のように思う。大切な人の驚くべき事実を知り、すぐに他の者の手により殺害され、永遠の別れになつてしまったあの時を . . . 。それから少年は、今では人々の記憶にも残っていないだろう存在を、ずっと忘れることはなかった。あの時も . . . 今も . . . ずっと。

第1話 古の武器、タークス就任前

少年の名は”スコール”レオンハート”といった。薄茶色の髪に青い瞳をした、弱冠若き17歳。彼は秘密結社の『新羅カンパニー』によって経営される、兵士養成学校『リユニオン』の”タークス”の候補生。あらゆる訓練や課題を難くこなす優等生で、とりわけ戦闘技能に関してズバ抜けた資質を持ち、その扱いの難しさから現代ではすたれつつある特殊な武器”ガンブレード”をやすやすと使いこなす。(ガンブレードとは・・・大型の剣に銃のメカニズムを組み込んだ特異な形状の武器。弾がセットされた状態でトリガーを引くと、強烈な振動が刃先へと伝わり、それによって威力が増加する。トリガーを引くタイミングを見極めることで攻撃力を増加させるが、扱いが非常に難しいため、使いこなすためには高い技量が要求される。) 時期合格者の最有力としての実力を備えているものの、常に他人との距離を置く姿勢と無口で無愛想な非社交的性格から、リユニオンでは問題児の一人としてみなされているのが現状。他人への徹底した無関心と拒絶には、よく言えば孤高、悪く言えば対人恐怖症というべきかたくなさが見られる。ただ、リユニオンの生徒の中には彼に一目置くものも少なくなく、高いカリスマ性を備えているのがうかがえる。

そしてもう一人の少年。名は”クレイド”ウオーケン”。スコールよりもひとつ年長のタークス候補生である。きわめて優秀な素質を備えており、オートマチック型のガンブレードを操るその戦闘力はリユニオン一、二を争う。とくにタークスに就任してもおかしくない実力の持ち主だが、与えられた指令よりも目先の敵に飛びつく好戦的な性格のため、毎回認定試験に失敗して、万年候補生の身に甘んじている。常に自分が中心にいないと気がすまないタイプで、それゆえに同じガンブレード使いであり、実力伯仲のスコールに対

し強烈なまでのライバル意識を抱く。また、勝利には異常なまでも執着を見せ、訓練であったとしても決して手を抜くことはない。なぜか風紀委員長を務める、リユニオン一の有名人なのである。同時にスコールはクレイドに戦いを誘われることも多く半ば彼に対し、少々嫌気が差してきた今日この頃。

そしてこの二人はお互いに命がけで戦わなければならないときが訪れる。決して逃げずに立ち向かう。そのときは近くすぎず遠すぎず・
・なのだった。

そんなある日のこと。また今日もいつもと同様にクレイドがスコールを挑発した。そして二人は訓練所で戦っていた。同じガンブレードが鮮やかな爆炎と共にカキーンという音を幾度となく繰り返し、ぶつかり合う。次第に戦いは終盤へと近づく。クレイドは魔法をスコールに向けて放つ。そしてスコールは体制を崩し、地面に手をついた。

「・・・っ!!」

スコールはなぜ彼だけ魔法を使えるのか、それは以前から疑問のひとつだった。リユニオン内では魔法は使う人がいない。というよりも今では禁止ということになっているのだ。何か裏にありそうな気はしていたが、このころの彼とは無縁だったため、それほど首を突っ込むことはなかった。

昔、授業で校長こと”カーティス”クレイマー”が話をしてくれた『魔女』という存在。今ではまったく見られなくなってしまったが、昔は結構いたらしく、ここリユニオンにも数名いたらしい。そのころにはまだ”魔法禁止条例”は執行されてはいなかった。一体なぜ、どうしてこんなことになったのか・・・。それはまだ聞いてはいなかった。カーティスが意図的に止めたのか、それとも自然に時間という理由で止めたのかはわかっていないが、なんにしてもまだ話してもらえてはいない。だからスコールはいつか聞こうと思っていた。

そしてスコールはゆっくりと体を起こし、立ち上がったその時だった。ニヤツつと不敵な笑みをこぼしたクレイドが思い切りガンブレードを振り上げスコールの顔めがけて下ろした。スコールは避けることができなかった。ポタツ・・・と顔から血が滴る。スコールは怒りが沸き立ち、すぐに立ち上がり同様にクレイドの顔に傷つけた。しかしそれは自分のよりも浅く、血はほんのわずかにじんだぐらいだった。そしてその後にもまたクレイドの反撃を受けた。

いつもと変わらないリユニオンの朝。スコールはいつの間にか保健室に横たわり、手当ても済んでいた。

「・・・ん・・・？」

ゆっくりと瞳を見開くスコール。すると保険の先生こと”シャロン”アークリッド”が来た。スコールを覗き込み言った。

「うん。目に力が出てきたね。大丈夫かい？自分の名前、言ってみな。」

「・・・スコール”レオン”ハートです。」

「大丈夫だね。それじゃあ君の教官に連絡してくるからもう少し待ってて。君の教官は・・・っと。ハーシエルだね。」

素晴らしい残すとシャロンは電話をかけたに去っていった。スコールはふうっ・・・とひとつ大きなため息をついた。

スコール・クレイドなどのクラスの教官を勤めるハーシエル”ピアス”。リユニオン所属の現役タークス予備軍であり、トップクラスの生徒の指導教官も担当する若き女教師。10歳でリユニオンに入学し、15歳で試験資格を得ると同時に最年少でタークスに合格、以後数ヶ月タークスでやり予備軍に移動、17歳という若さで教員の資格までも取得した超エリートである。その才色兼備ぶりから、熱狂的な崇拜者たちが”ピアスFC”を組織するなど、生徒たちには男女問わず人気が高い。しかし、そうしたことへのやっかみもあつてか、同僚の教師の中には経験と指導力不足を声高に指摘するもの

もいるようだ。実際、優秀であるがゆえに、挫折には不慣れで、落ち込んだときにはふと、弱気な本音も口にしてしまうことも。教えずながら1歳違いのスコールには、好意以上のものを感じており、何かとちょっかいを出す。

「あ、ハーシエル？悪いけどあんたの生徒引き取りに来てよ。」

シャロンがハーシエルと会話をしている。スコールはあの後クレイドの反撃を受けた後から記憶がブツリと途切れていて、どうしても思い出せなかった。なんにしてもクレイドはいつでも本気がかかってくるため、スコールは終わった後は傷がひどいのだ。(いつも)話を終えたシャロンがスコールの元に戻ってくる。スコールは体を起こした。

「今ハーシエル先生と話しつけたから、もうすぐ来るよ。」

「……………すみませんでした。」

「待つたくねえ。無理をするんじゃないよ、スコール。君をここで手当てするのは何度目だい？私はもう数え切れないよ。」

「……………逃げるわけにはいかないから。」

「かっこつきたい年頃なんだねえ。まあでも気をつけるんだよ。」

「(……………)ありがとうございます。」

すると自動ドア式の保健室のドアが開いて一人のきれいなブロンドの女性が入ってきた。彼女こそハーシエルなのだ。ハーシエルはシヤロンと入れ替わりにスコールのところに来た。そして頭を抱えてため息をひとつつく。

「絶対あなたかクレイドだと思ったわ。ほら、スコール立てる？HR始めるからクラスに戻って。それで集合させておいてね。」

「……………ああ。」

そしてハーシエルとスコールはシャロンに礼を言って保健室を後にした。そして1フロビーまで一緒に歩く。

「スコール、課題は終わった？」

「(課題?・・・あああの洞窟を時間以内にいつて帰るやつか。)
・・・ああ。」

「でしょうね。あなたのことだからね。はあ、クレイドと違ってあなたは優等生で私も助かるわ。これから仕事頼んじゃおうかな。」
くすくすと笑うハ・シエル。スコールはふうつとまたも溜め息。

「(・・・自分のことは自分でやれよ。・・・それにあんた教官だろ?)」

「あら、なーに?」

「別に。」(スコール、ハ・シエル同時)

くすくすと笑うハ・シエル。スコールは立ち止まりくるつと振り返る。

「・・・なんだよ。」

「ううん。生徒のことがわかってきて嬉しいってだけよ。」

そうこうする内に1Fロビーへ到着。そこで職員室に向かうハ・シエルと教室に向かうスコールとで一瞬別れる。するとエレベーターの前で不安そうにきよるきよる辺りを見回す女子生徒と会った。スコールは邪魔だな・・・と思っているとその女子生徒はスコールを見つけるや否やすつ飛んで来ていった。

「キミが一番頭よさそう!!あのさ、教室つてどこ?!っていうかハ・シエル先生のクラスなんだけど。私転校したてで分かんなくてさ。案内してくれない?」

「(ハ・シエルはもう少ししたら来るよな。H、Rの後にでも遅くないよな。同じクラスならなおさらだ。)...ああ。でももうすぐH、Rが始まるからその後でいいか?」

「全っ然構わないよ!ありがと。あ、紹介遅れたね。私はラピス
!!キヤルオル!!」

「よろしく。」

普通の学校からここリユニオンに転校してきたばかりのタークス候補生、ラピス!!キヤルオル。見掛け通りの天真爛漫さで、編入早々、

なり手のなかつた学園祭実行委員に立候補して勝手に就任したり、ちよつとしたガケなら飛び降りたりと、その行動力に周囲の人間は、イヤが応でも巻き込まれることになる。のんびりとした口調とは裏腹に、過激な発言も多く、あつけらかんとしたキツイジョークは、時に緊迫した状況をやわらげてくれることも。そんな性格から、ただの天然ボケと思われがちだが、実は非常に気を使うタイプらしく、本当につらい時でも人前では笑顔を絶さない優しい少女である。

そして2人はエレベーター内でも話した。・・・と言うより、ラピスにおされ気味でスコールがあえなく答えるといった感じだろうか。

「へえ〜。そうなんだあ。」

「・・・ああ。ほらここが教室だ。」

「わーい到着ー ありがとうースコール。」

そしてラピスは礼をして教室に入った。スコールも教室内の生徒を静かにさせて座らせた。そして自分も席に着く。

するとその後すぐにハーシエルが入ってきた。

「おはよう。それじゃあ連絡するわね。今日、試験課題の行動と筆記を合格していない者は自習。合格したものは1フロビーに15分後に集合。実地試験が行われるわ。この試験でタークスへの仲間入りが決定するから頑張つて。それと・・・クレイド。」

クレイドはハーシエルを鋭い目つきで見る。

「訓練は良いけれど相手には怪我を負わせないように。そして校則6章21項。ちゃんと守りなさい。」

「（6の21・・・魔法禁止条例か。まあリユニオン内ならクレイドだけにあるようなもんだな。」

クレイドはダン！と机を叩いた。そしてスコールをニラみつけたが当本人はまったく眼中にクレイドは入ってなかった。ハーシエルはため息を密かにつくとトントントと資料を整え立った。

「それでは以上。解散！」

そしてハーシエルは教室を出て行った。その途端にピアスFCの人

たちが集まり、なにやらハーシエルについて語り合い、幸せに浸っていた。

スコールは全くそういうものに興味はないが、ハーシエルにとってスコールという存在は前記のようなのでピアスFCの者からはいろんな目を向けられているのは日常茶飯事だ。

尊敬する者もいれば妬む者も少なくない。今もまたいろいろと言われるのだった。(しかしスコールは左から右に抜けていたが。)

一通り聞き終え、FCの者など教室の中は大方退けてきた。するとそれを見計らってラピスがスコールに向けて手を大振りした。

我に返ったスコールはラピスの元へ走り、一緒に1フロビーの案内板に行った。

「わざわざごめんねー。ありがとー。」

「(それにしてもものんびりとした奴だな・・・) ああ構わない。」

そしてスコールは一通りその場所の特徴や施設を話した。

そしてスコールが一通り説明し終わると、ハーティスとスコールの先輩のトークスの”シュウニツカル”という女子生徒(これまた優秀)と校長が1フロビーに来た。

「あら、もう集合してたのね。早いこと。」

「あ、ハーシエル。この子?」

「そー 私の自慢の生徒よ。スコール、彼女はシュウニツカルよ。何度かあったことあるでしょ?」

「(・・・あつたか?この女子生徒に?シュウ???)
ん”—————(?!ああ、あの時の・・・)」

「覚えててくれて光栄だね。よろしくね、スコール。」

「はい。」

そして握手をした。続けてラピスも。そして時間になったのでハーシエルは班の発表をした。

「・・・A班、

B班

C班

・・・」

ちなみにスコールはラピスと同じD班だった。4つの班で1班4、

5人で行動するのだ。

「最後にD班ね。スコールⅡレオンハート、ラピスⅡキャルオル、あとⅠⅠⅠウルフⅡハルト、あのにぎやかな彼ね。」

「ⅠⅠⅠはあ。メンバーはもう変更できないのか？」

「もちろんです。」

そう言っているとき少し遅れてウルフⅡハルトという男が来た。武闘家なのである。少々スコールは苦手なタイプだった。

「よろしくな、スコール！！」

「ⅠⅠⅠⅠⅠⅠはあ。ああ。」

ウルフⅡハルトは単純明快な人だ。スコールと同じく、リユニオンに在籍するタークス候補生。実家のある”ヴェンター”では、”暴れん坊ウルフ”と呼ばれ、知らぬ者のないほどの熱血やんちゃ少年だった。リユニオン入学後もそれは変わらなかったらしく、何事も勢いにまかせて行動し、理詰めで物事を考えるのは苦手。それゆえに失言も多く他人には落ち着きがないという印象を持たれがちである。

成績も優秀とまではいかず、周囲の評価では、タークスに合格する確率は五分五分といったところだが、こと格闘技のセンスには目を見張るものがあり、小柄ながら日々鍛錬を怠らなかった肉体は、不利な状況をひっくり返すほどのバイタリティに満ち溢れている。なお、校則違反の常習者のため、風紀委員のマークは厳しい。

「あとはクレイドⅡウォーケン。ⅠⅠⅠ言っとくけどあなたたちの班の班長よ。」

「ゲッⅠⅠⅠⅠⅠⅠマジかよⅠⅠⅠ。」

ウルフはガクーンと肩をだらんと垂らす。スコールも腕を組み、ふうつとため息をついた。ラピスだけはクレイドについてさほど知らないためよく分からなかった。が、ウルフとスコールがここまで悩ませる人ならよほどすごい人なんだろうと思っていた。すると噂を

した途端にクレイドが現れた。

「遅刻よ、クレイド。」

「悪い悪い。で？俺のメンバーってこいつら？狼野郎（ウルフだから／笑）にスコール、んで・・・誰だお前。」

「あ、私？私はラピスⅡキヤルオル。転校して来たばっかなんだあゝ。でもなんか試験がヒョイヒョーイって終わって！。一緒に実地試験することになったんで！す。よろしくー班長ー。」

「（まあゝ随分とのんびりした女だな。）ああ。」
そしてクレイドはいきなりヒュツ・・・！！と手を高く上げ3人に言い放った。

「いいか、てめえら。班長の言うことは必ず聞くもんだ。分かったな！！！」

「（・・・はあ、出た。クレイドの自己中心的性格・・・。俺はこんな奴の言うことも聞かなくちゃいけないのか・・・）」

「ん？スコール、なんだ？」

「・・・別に。」

そして一段落ついたので総勢16名が校長の話聞くことに。これを合格すればタークス目前なのだ。

タークスはリユニオンが抱えている傭兵のコードネーム。リユニオンの生徒の中でも特に高い能力を有する者たちで構成され、戦闘支援などの任務を少数精鋭でこなす。タークスになるためには、筆記と実技による2段階の試験に合格しなければならない（受験資格は15歳以上）。
タークスに認定された者は、各方面からの派遣要請に応じて任務につき、タークスランクの規定に応じた給料が、一定期間ごとに支払われるのだ。

「皆さんはこれから先輩タークスの方と共に敵の侵入を食い止めてもらいます。あっちでは本当の戦場が繰り広げられています。生か

死か・・・勝利か敗北か・・・いわゆる弱肉強食の世界です。どーです？怖気づいた人はいますか？万一そうでも心配はいりません。無事タークスがやってのけてくれるでしょう。タークスは戦闘のスペシャリストです。年に一度しか訪れないタークスになれる可能性の日です。精一杯力を発揮して頑張ってくださいね。」

それで校長の話は終わった。すぐさま、シユウが指令を出す。

「これから我々は先にいるタークスの支援をするため、”ロジャーナ”へと向かう。すぐに24分発ロジャーナ行き列車へ乗り込め。今回の指揮は私とハーシエル先生で行う。以上、解散！」

そして16名はターミナルへと小走りで行った。すると校長がスコールを呼び止めたので、スコールはすぐに止まった。

「ごめんなさい、スコール。呼び止めてしまつて。」

「いえ。構いません。」

「あのですね、まだ未だにガンブレードタークスはいないんです。だから君とクレイドには是非ともなってほしいんですよ。期待してますからね、スコール。」

「（期待か・・・）はい。精一杯頑張ろうとは思っています。それではターミナルへ急ぐので失礼します。」

「はい。」

スコールは校長に深く一礼し、もうダツシユで駆けていった。なんやかんやであと5分しかない。歩いて20分、小走りで12分くらいの距離を5分で行かなくてはならない。

その後姿を見ていた校長は小さく手を、見えなくなるまで振り続けていた。

残り2分のターミナル。あとはスコール1人。

「スコール!!レオンハート!!!いたら返事をしなさい!!」

「スコールー!!!」

ハーシエルとシユウ、そしてウルフとラピスが叫んでスコールを呼ぶ。すると遠くからスコールが猛ダツシユする姿が確認できた。

そしてスコールはぎりぎりに飛び乗ることができた。少々息切れを

したようだ。

「ふうー。良かった。これで全員そろったわね。」

「・・・遅れて・・・すいませんでしたっ・・・」

「遅れてはいないわ。ちゃんと時間に間に合ったんだから。さっ、他のみんなも準備して！到着したら試験開始よ。」

生徒たちの緊張が膨らむ中、着々と列車はロジャーナに近づいていった。

そんなころクレイド率いるD班の4人。ハーシエルとシュウと一緒に作戦や実地の守備範囲について聞いていた。1人以外全員真剣だった。1人とは無論クレイドだ。

「はあ、全く。クレイド、これで何回目？」

「俺は試験がすきなんだよ。早く殺りてえな……。くくく……。ぞくぞくしてくるぜ。」

「（ハア。戦闘狂は何考えてるんだか予想がつかない。クレイドが いい例だ。まあでもクレイドが班長だし、従うしかないか。）」
そしていつしかロジャーナへと到着。AとD班がそれぞれの持ち場へとつく。

「行くぜ！！野郎共っ！！」

先陣をきるクレイド、そしてそれに続く3人は持ち場へ行きながら 侵攻の手を食い止めていった。ウルフとラピスは目の前の2人がガンブレードを木の棒のように軽々使いこなしている姿を見るなり感嘆せざるを得なかった。

そうこうする内にいつしか敵が出現しなくなってしまった。

「班長。終わりかなあ。敵でなくなっただよ？」

「そうだな。・・・クソッ！！俺を退屈させるな！！もっと出てきやがれ！！」

しかし5分待つても10分待つても出てこなくなり、ついにクレイドはキレ、スコール他2人に周りを見てこいと命令した。

「どもよあクレイド。D班の持ち場はここだろー？他んとこ見たら評価下がっちゃうだろ？」

「あん？お前何て言った？そうか・・・班長の言うことが聞けない、と。」

「（・・・班長の命令は絶対だ。逆に何もしないほうがもっと評価は下がるし、クレイドにもケチつけられる可能性がある・・・と思う。）ウルフ、ラピス。・・・行こう。」

それを聞くなりウルフとラピスは目を丸くしてスコールを見た。しかし何も気にせずにスコールは1人スタスタと周囲を見に行った。あわてて追いかける2人。その後姿を見るなりクレイドはククク・・・と不敵な笑みを浮かべた。

「（そうだ。班長の命令は絶対なのさ。・・・スコール、楽しんでるか？ククク・・・）」

3人が居なくなっただけからクレイドは、ふと気づく。隠れて様子を見ながらいると、ロジャーナに侵攻してきた敵『ナイトメア』がこの町の奥にある”電波塔”へと向かっている。それに気づいたクレイドは様子を探るべく1人で行ってしまった。

一方そのころのスコール含める3人はというと、もう敵は近くに居ないのを確認し、戻ってきた。が、クレイドが居ないのに気づく。

「あんにやるお（イライラ）また一人でホイホイと事を進ませやがってえ（イライライラ）」

「（・・・クレイドはどこへ行ったんだ？）・・・ウルフ、ラピス！！隠れる！！」

「ええ？！」

そして3人は隠れた。そして隙間から耳をそばだて、ナイトメアの話に聞き入る。

「ったく。なんだかなあ。いまさらこの電波塔に行っただけのことねえだろ。」

「しょうがないだろ？上司の命令なんだから。・・・でも、なんにしてもあれを復活させて電波放送をするらしいぞ？」

「電波放送？・・・なんか、わけわかんないからオレ、パス。さ

「行くか！」

「おお。」

その2人のナイトメアが行こうとすると奥から傷だらけのナイトメア1人があらわれた。

「・・・早く・・・行け・・・！10代の・・・白い服を着た、ガンブレードの男が・・・！！！」

「なんだって!？」

そしてその男は力尽き、2人のナイトメアも走った。そしてスコールたちも物陰から出る。ウルフがスコールに言う。

「なあスコール!!白い服のガンブレードの男って、クレイドだよな!行くのか!？」

「どーするう?班長行っちゃったしね!。まあ私はスコールについて行くよ。」

腕を組むスコール。

「(・・・どうして俺なんだ。俺だってどうしたらいいかわかんないんだぞ?俺に頼るなよ。そもそもクレイドなんかを班長にするくらいいけないんだ。・・・ん?どうしてアイツなんだ?・・・ああそうか。1番年長だし強いからか。)・・・ハアしょうがない。行こう。後で先生に言えばいいことだ。オレたちは悪くない。」

「よし!!行くぜ!!！」

「はーんちよあー」

そして3人は敵を蹴散らしながら電波塔へと向かった。

そしてやつとの思いで到着すると、先にクレイドが中に入っているのが見えた。ラピスはひょーいっと崖から飛び降り追いかけた。スコールたちは回り道をしてでも道を道を通って追いかけた。

「もースコール達もひょーいって飛び降りたらいいのに!。」

「(・・・ここからあそこまで何mあると思ってるんだ。失敗じゃすまねえっつの。)・・・無理だ!！」

「とにかく追いかけようぜ!！」

そして3人は電波塔に入った。そしてクレイドを急いで追いかけた。

「ここをこうして・・・」

「先輩、異常なしです。」

「わかった。こうして・・・これかな？うん。それで・・・」

先ほどの2人のナイトメアが電波塔にある機械の復活作業を行っていた。するとその時クレイドがザツ…とガンブレードを掲げて現れた。

「・・・なーにやってんだ？テメエら。」

「・・・?!お前こそこんなところで!!」

「オレはナイトメアの連中を狩りに来たんだよ。」

徐々にクレイドが2人に近づく。冷汗が滴る。ゴクンと唾を飲み込む。

「せ・・・せんぱい・・・。ヤ、ヤバいっス・・・。」

「こうして・・・っと。出来たあっ!!」

と手を挙げ喜ぶ。すると電波塔の機械にすべて電力が今ので伝わり、動き出した。そのすぐ後にスコールたち3人もクレイドに追いつくことが出来た。少々息切れの3人。猛スピードで来たのだ。

「おいっ!!クレイド!!」

「スコールか。」

「勝手に行動するな。ついでにさっき伝令の生徒が来て言った。後15分で帰還せよ、とのことだ。」

「15分だあ?・・・ケツ分かったよ。いくぞ、野郎共。」

そして4人は走り出した。するとナイトメアの1人が音鳴を使い、指令した。

「・・・今から逃げる4人のガキを捕まえて殺せーっ!!!」

そして1台のナイトメアの強力な兵器ロボットが4人を追いかけた。

ガシャガシャ・・・と音がする。振り返るウルフ。他の3人はその音には気付かなかったが、スコールは先に2人を行かせ戻る。

「何やってんだ、ウルフ！！後5分しかないぞ！！」

スコールがウルフに向けて叫ぶ。その途端2人は一瞬硬直し、必死に逃げた。ウルフが走って叫ぶ。

「冗談じゃねえぞーっ！！！！」

ロボットのスピードは徐々に速度を増した。

やっとの思いでターミナルが見えた。AとC班の乗車はもう済んでおり、残るはD班のみ。なんとかクレイドとラピスはシユウに連れられて中に入ることができた。ウルフとスコールは今もなお走り中。

「あっ・・・ウルフ！ターミナルが見えたぞ！！」

「よっしやあー！！って言うか速度上がってないかあーっ！！？」

「逃げるが勝ちだ！」

するとハーシエル含むほか8人のプロタクスがそれに気づき2人を救出した。プロタクス2人がウルフとスコールを援護し、他6人とハーシエルが銃やら剣やらでロボットを破壊した。そして急いで駆け込み列車はリユニオンへ向けて発車した。スコールはプロタクスの鮮やかな手早さに感嘆した。スコールは一刻も早くなりたいが、今年は・・・無理だと思った。

詳しいことは後で校長とハーシエルを交えて聞くとわれ、車内は静まりかえっていた。

リユニオンに到着した。D班はその場に残り、他のAとC班はタクス合格者発表までの30分は生徒寮に戻った。

そしてシユウが校長を呼びに行った。ラピスが残念そうにウルフに話す。

「ウルフ。うちらってきつと不合格、だよなー。」

「・・・だろうな。ちえっ、せつかく筆記受かったのによ。ラピスは問題ねえよ。またどうせ受かるだろう。スコールなんて絶対一発合格だ。はあく。おれはあと何回受けりゃいいんだよ・・・(汗)」
ガクーンと肩を落とし、うなだれるウルフ。

「何回受けたの？」

「今回でここまでは2回目。筆記で大抵落ちて。もう5、6回は受けたぜ？んでよ、スコールは今回初！！・・・まったく、あいつも不幸だよな」。AとCのどれかなら合格間違いなしなのによ。」

「そっかあ。」

そうこう話していると校長とハーシエルが来た。

「D班4人整列！」

「ああいいんですよ、ハーシエル。みんな楽しんで。・・・えっとですね、今回のことですが・・・何があったんですか？」

班長であるクレイドは特に何も言わずに、スコールを指した。ウルフとラピスもこくんとうなずき、スコールは1つ溜息をついて話した。

「我々D班は公園広場を任せられました。着々と進み、侵攻の手を阻止したものの、班長のクレイドが周囲を見てこいとこの命令なのでウルフ・ラピス共に向かいました。侵攻者は見当たらなかったもので帰ったら、行方不明で討論していたところ、たまたま侵攻者の話が聞くことに成功したので聞き入りました。すると本来の目的はこちらへの入国ではなくロジャーナの電波塔の復活らしく、その上クレイドが向かっていたという事も聞けたので少し悩みましたが向かいました。その途中ハーシエル先生の使わせた伝令の生徒と出合ったので伝えるためにというのと班長のもとへの2つの理由で行き、無事落合いました。帰ろうとしたところ、いきなり兵器ロボットが追いかけてきました。クレイドとラピスは先に乗車し、俺とウルフはプロタクスの方々とハーシエル先生により、保護され、無事にリユニオン帰還に至りました。・・・報告終わり。」

ウルフとラピスはスコールの的確なおかつ分かりやすい説明と報告に感嘆した。やはりスコールはスゴイなとも思った。校長は一礼するとクレイドの許へと向かって言った。

「・・・クレイド。キミは戦闘に関して、私も一目置いてます。しかしそれが行動にちゃんと表れるといいですね。・・・今回、この責任はキミにあります。よって少し反省も含め、独庫室へと行って

もらいましょうか。」

校長は少し厳しい口調と目つきで言った。クレイドはふてくされながら校長とハーシエルと共に独庫室と言われる、いわゆる反省させるための1人きりになれる所へと向かった。後から来たシユウはスコールたちを教室前で待つように言った。そろそろ合格者発表が行われるのだ。そして向かった。

とうとう合格者発表。クレイドを抜かす15名がいろいろな面持ちで待ち構えていた。次々に名前が呼ばれる。

「・・・ウルフ＝ハルト。・・・ラピス＝キャルオル。・・・スコール＝レオンハート。・・・以上7名が今回の合格者だ。名前の上があった生徒は校長室へ向かいなさい。」

そう言われて7名は向った。他8名は悔しくてしていた。校長室に向かい、認定証ライセンスをもらうと新しくなった生徒寮も、別館のタークス寮にと変わって、制服ももっとかっこいいものになった。そして就任パーティーが始まった・・・。

第1話 古の武器、タークス就任前（後書き）

遅くなって大変申し訳ございません。

こんなものでも見てくださる方が神に見えます!!

第1章の後半もただいま執筆中ですので、ゆっくりお茶でも飲みながら待つてくださるとうれしいです (^-^;))

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4028b/>

LEO

2010年12月14日18時56分発行